

あり、舊蠟〔蠟〕漸く埃成して納入を了り既に靖國神社に御下賜ありて近く其拜殿内に懸けらる可きものゝ影象なり。始め依囑の事あるや學校長の命を承けて渡邊「香涯」教授は圖稿三四を作りて之を提出し内二種の撰定を得たり。一は陛下の御獻燈、他は皇族御一統より御寄贈のものなり。此二定稿により更に實作現寸圖を作成す。前者は四角型にして清涼殿型と春日型とを折衷案配せるものにて後者は六角形春日型なり。靖國神社の拜殿は間口十二間奥行七間に渉る廣大なる建物なれば、懸燈も亦大なるを要す。則ち四角型の方は底面一側の長一尺六寸檐先の一側の長さ三尺〇七分總高三尺九寸、神前の懸燈としては先づ大なるものなる可し。六角型の方は稍小くはあれど尙六角底面の徑一尺五寸檐先の徑二尺八寸五分高二尺三寸五分、決して小さくものにはあらず。

製作は小生之を擔任し鍛金分科研究生八田辰之助、寺田龍雄、秋田頼一郎、彫金分科研究生相川久、鴨政雄、山脇洋二、以上六名を督して六月初旬業を始め懸命の精進と晝夜の努力とを以て半歳を踰へ無事其業を卒へたり。

材料は全部黒味銅にて特に製銅所に囑して之に調製せしむ。主體に於ては其厚さ一分より薄きも七厘を下らず。鍛金製作としては決して容易の事にあらざるなり。重量は四角型のもの一個約二十七貫六角型のもの一個約十三貫なり。尙製作法に關し特異の點を舉れば御紋章は全部之を打出彫として水銀渡金〔鍍〕を施すこと七回、屋根柱火袋等の各部分は多くは蠟附又は振鋏を以て構成せられ、獨り六角型燈籠の屋根のみ鍛金術を以て作られたるものなり。ともあれ陛下並に皇族御一統より神への永久の御あかし、

其製作を奉仕せし一同の感激眞に淺からざるものあるなり。

(『東京美術學校校友會月報』第二十九卷第七号)

⑮ 无型の活動とその影響

昭和五年に工芸の革新をめざす无型同人が第一回地方巡回講演を行なった。『无型』24号(昭和五年十一月十八日)には次のように記録されている。

高村、廣川、杉田、豊田、山崎、松田、稲場の七人で北陸都市に巡回講演を試み、空前の大成功を収めた。

七月廿一日富山市。商業會議所。

七月廿三日高岡市。商品陳列所貴賓室。

七月廿四日金澤市。兼六館。

七月廿七日福井縣下、武生、遠敷、小濱、河和田各地方の工芸指導。

講演題目は次のやうなものであつた。

- 都會の商店から見た地方の工藝 稲場 勝邦
- 外人は漆藝を何と見るか 松田 權六
- 工藝を語る 豊田 勝秋
- 現代工藝の基調 杉田 禾堂
- 漆藝の現在と將來 山崎覺太郎
- 工藝圖案の庶民性 廣川松五郎
- 作品批評 同
- 工藝の地方色と現代性 高村 豊周

○近代美に就て

同

なほ講演には實物幻燈を使用した^{〔勉〕}が、これがまた素晴らしい効果をもたらした。暑い最中の事として随分骨は折れたが、それだけの價値は十分あつた。各地方で熱狂的の歓迎を受けて七月三十日歸京した。

北陸工藝巡察記と題する一〇〇頁弱のパンフレットを印刷して各地方の關係者へ配布した。

この講演会が一つの契機となつて翌六年四月、石川県出身の鑄造科卒業生、在校生が型人展を金沢と高岡で開催した。因みに石川県出身の卒業生は昭和五年九月一日調べで一三三名。東京府出身の五九七名に次いで多く、これに福岡県一一五名、富山県と香川県各一一三名、新潟県九九名と続き、この一府五県出身の卒業生数が群を抜いている。

『東京美術学校校友会月報』第三十卷第二号の「芸苑彙報」に掲載された末吉菊麿（昭和八年鑄造科卒）の文によれば、型人社は昭和五年秋創立。同人は八井孝二、長谷川八十吉、辻正雄、中垣秀吉、真鍋知道、浅野茂夫、広瀬英五郎、森新二、末吉菊麿の九名で、顧問は先輩の青木外吉（石川県商品陳列所長）であつた。第一回展を四月十四日より十九日まで金沢三越ギャラリーに開催し、同人出品合計四十三点、外に賛助出品として津田信夫、高村豊周、杉田禾堂、内藤春治らが各三点ずつ出品。地方展としては未だ嘗て無い内容であつたので好評を博し、良成績を収めた。そのため隣接地富山県高岡商品陳列所からも招聘をうけ、引続き四月二十四日より二十

九日まで高岡商品陳列所に同展を開催して成功した。金沢市は京都に次ぐ工芸美術の都市であり、また高岡市は鑄物業地として全国屈指の地であつたから、この新工芸の展観は北陸工芸界に大きな波紋を投じたという。